

しがじん VOL.25 2022.5

SHIGAJIN

全障研滋賀支部発行 TAKE FREE!



「特集 出会いと旅立ち」

「障害の重い人への実践と発達の研究 中間報告」

学習会報告 サークル活動報告

特集 「出会いと旅立ち」

春は、様々な出会いと旅立ちの季節です。大きく環境が変わると、大人も子どももドキドキ、そわそわしますよね。この時期に思い出す、「出会いと旅立ち」のエピソードを集めました。皆さんはこの春、どんな出会いがありましたか？

特別支援学校の教師になって2年目の春、私と同じく小学部2年目のえりちゃん（仮名）に出会いました。クラスはどの子どもも言葉でのやり取りを楽しめる段階。クラスの他の女の子はまさに「好きな色はピンク」「プリキュアになる！」ブームでしたが、えりちゃんの好きなものは「かえるの緑色」「ジンケンダー」という絶妙なチョイスでした（笑）

とにかくマイペースなえりちゃん。いつもクラスのみんより一歩、二歩遅れてしまうのですが、特に気にせずにつきり。えりちゃんの忘れられないエピソードと言えば、「七夕飾り」を作る学習です。三角形を三つ選んでのりで貼りつけるのですが、えりちゃんは一生懸命に赤の三角形ばかりを選んでいました。学習後も教室中に赤い三角形を貼るえりちゃん。「何してるん？」と聞いてみると、「サンタさん来るからな〜」と真剣なえりちゃん。えーっ！導入の七夕の絵本の読み聞かせや歌の時から、とにかくサンタさんの帽子とクリスマスツリーだと信じて疑わなかったようです。

相担の先生方はそんなえりちゃんを温かく見守るベテランの先生方だったのですが、えりちゃんにとっては、一番頼りなさそうな、ゆるーい私が安心できる存在だったようです。私を支えに、活動を頑張ってみたり、崩れた気持ちを立て直したりする場面が増えてきました。

3学期になり、「先生のこと大好き」と言葉でも伝えてくれるようになったえりちゃんですが、そのころから、「3年生も先生じゃないと嫌だ」と泣くことが増えました。3月には「クラスが変わっても、絶対にまた会えるから」と説得する日々が続きました。最終日にはお互い涙がポロリ…

そして迎えた4月。なんと私はまたえりちゃんの担任をすることに！緊張した様子で登校してきたえりちゃん、私の顔を見て一言「またかーい！」。二人で大笑い。素敵な二度目の出会いでした。

クラス唯一の3年生になったえりちゃん。みんなのお姉さんになって頑張ろうとする姿が増えました。あのえりちゃんがお友だちに「〇〇しいや」と声をかけるなんて…。2年続けて担任したからこそ感じる成長がたくさんありました。それでも時々ころんだり、友だちとけんかしたりすると「先生〜、おんぶ〜」と私を支えにしながら。

そして迎えたえりちゃんとの2度目の年度末。また去年のように崩れてしまうかな、と少し心配していた私にえりちゃんが言った言葉は忘れられません。「先生、さみしくなったら4年生に遊びに来てもいいで！」めっちゃくちゃ上から目線（笑）と思いつつ、大人を支えにしていたえりちゃんが、一人でも頑張れるようになったことを教えてくれたようで本当にうれしかったです。

えりちゃんとの2回のお会いと旅立ちは、笑いながら泣きながら、ゆっくりと、でも確実にお姉さんになっていく子どものエネルギーの強さを私に見せてくれました。

4月にいろんな子どもに出会うたび、「どんなお兄さん、お姉さんになるのかな」とわくわくさせてもらえるのは、えりちゃんのおかげです。これからもいろんな出会いを大切にしながら、子どもたちと一緒に成長していきたいです。

県立養護学校教員 ペンネーム：バリィさん



『出会いをつなぐ』

担任をした年長（5歳児）クラスには、とても小さく生まれた A さんと、車椅子を使う B ちゃんがありました。A さんと私が初めて出会ったのは、保育園入園に向けての引継ぎで療育教室に行った日でした。1歳児だった A さんは、華奢な小さな体で教室の斜面台を PT の先生と一緒に登ったり滑ったりしてあそんでいました。お尻をクッと持ち上げて傾斜に抗う姿が、新年度に向かう自分と重なるようで、保育園で会う日が楽しみになったことを覚えています。同じクラスには B ちゃんもいて、その日は親子登園日で B ちゃんのお母さんも同室におられたそうです。B ちゃんは、もう一年間、療育に通い、保育園でまた A さんとクラスメイトになりました。

あれから4年が過ぎました。二人とも自分の思いをたくさん表して育ってきました。いつも隣にいるような仲ではありませんが、互いにお世話を焼く、気兼ねのない二人です。そして、パワフルな5歳児集団の中でキラリと光る大切な仲間です。

今年、B ちゃんのお母さんと療育の頃の話になり、「あの日（引継ぎの日）のこと覚えてますか？私は覚えてますよ。B の保育園を考える時に、A さんの引継ぎの日の先生の姿が頭に浮かんだんです。」と教えてくださいました。私は驚きとともに「その期待に応えられたかな…」と少し心配にもなりました。コロナ禍での保育の難しさや、子どもたちの溢れるエネルギーを前に、私自身たじろぐことも多かったからです。モヤモヤとした気持ちが心を包むような日には、子どもたちの笑顔を思い浮かべると心が晴れる気がして、何度も二人から元気を分けてもらいました。

4月から二人は居住地の小学校に入学しました。同級生として学校生活が幕を開けます。これまで、順風満帆な日も、無風の日も、風に押し流される日もたくさん経験してきた二人です。これからも、周囲の人を惹きつける笑顔で、出会う人の心を温めてほしいと感じています。私も、温めてもらった心を、これから出会う子どもたちに大切につないでいきたいと思います。

大津市立保育園（保育士） 天野 佳和



『きょうだい児じゃない人になにがわかるねんって思った。でも、みんなと過ごすなかで、自分みたいにきょうだい児っていう必然的なきっかけがなくても、障害児教育に向き合っただけで真剣に考えてくれる人がわたしのまわりにはたくさんいるってことに気づいた。』これはわたしの大好きで尊敬してやまない大学の仲間が卒業のときに伝えてくれた言葉です。

わたしは今年で特別支援学校の教員になって5年目を迎えました。5年目にしてはまだまだわからないことや上手いかわからないこともたくさん。子どもたちが見せる姿に元気とパワーをもらいつつ、悩みつつ、の毎日です。

上に書きました、仲間からの言葉をことあるごとに思い出しながらこれまで教員生活を歩んできました。特に、子どもたち、そしてそのご家族に新しく出会うこの春の時期には毎年必ず思い出します。わたしはきょうだい児でもないし、ましてやまだ子育ての経験もありません。きっと、子どもを毎日一番近くで育てておられるご家族の方々には「そんなあなたになにがわかるねん」と思われる方もおられるだろうなあ…と。でも、そんなわたしにでもできることもあると信じています。それが『わかってもらう』こと。子どもたちはこころの中で本当は何を感じ、何を思っているのか、わかりきってあげられない部分も大きいですが、だれよりもわかりたい！同じように、ご家族は本当はどんな思いや不安を抱えて過ごしておられるか、全部丸ごととは難しくても、わかりたいし、一緒にわかち合わせていただけるような教員でありたい！そんなことを思いながら今年度もスタートを迎えました。

県立養護学校教員 望月ふみ

支部研究プロジェクト「障害の重い人への実践と発達の研究」の取り組みについて —その1 アンケート調査の実施と回答サークル等について—

滋賀支部の「障害の重い」人への新たな研究プロジェクトについては、昨年の「しがじん」でも、取り組み目的等について紹介しました。若干、振り返るとともに、今回の第1回プロジェクトであるアンケート調査研究にどのようなサークル等が参加したのか、また、回答例を一部取りあげてみます。全体的な結果とそのまとめは大部になるので、滋賀支部のホームページへの掲載を考えていますが、その一端を次回に報告したいと考えています。

今回のプロジェクトは、第1に、「障害の重い」人（子ども・青年・成人）への教育権保障運動の滋賀県の歴史（養護学校教育完全実施までの福祉分野と教育分野での運動の歴史）に学びつつ、今日的課題や到達点を明らかにすること、第2に、就学前期から青年・成人期のライフステージの視点に立ち、「障害の重い」人の発達保障を前進するための条件を検討することを目的に事務局を中心に議論し進めてきました。

今回のアンケート調査は、研究プロジェクトの第一弾として位置づけています。その後のプロジェクトとして、例えば、「障害の重い」人への実践等（これまで発表しているサークルや個人等の論文やレポート）を支部として集団的に深め、実践の意味づけを通し、「障害の重い」人の理解と支援において、大切なことを共有する、そして、この場合、全障研ならではのライフステージにまたがる研究や各支援機関の連携の検討—社会的な条件の改善と関連させた研究—を考えることができます。

さて、今回の研究に参加したサークル等は、就学前期は、児童発達支援センター2カ所、市役所幼保支援課1カ所の24名、学齢期は、養護学校6カ所の39名、青年・成人期は日中事業支援事業所（共同作業所）・共同生活援助事業所（グループホーム）・生活介護生活訓練事業所・短期入所事業所・居宅支援事業所8カ所の28名、その他4名の計95名であった。また、「重い障害」の人への関わりの有無は経験有（担当者・担任者・副担任者等）が88名、経験無が7名であった。回答の一部は以下に紹介します。次回は、全体の特徴と課題等、報告します。 （研究部 黒田吉孝）

✿アンケート結果の一部をご紹介します✿

「障害の重い人」へのイメージを教えてください。

- * 知的障害の重い方と肢体不自由と知的障害がある方。どちらかといえば、自分の意思を伝達するのが難しい段階の知的に重度な方。（養護学校教員）
- * 医療的なケアを必要とする人、強度行動障害など人的、空間的な配慮を必要とする人。広く捉えると生きづらさを抱え、あたりまえに働く、暮らす、生きるために支援を必要とする人。（作業所職員）
- * 大島分類で定められる重症心身障害（身体・知的）のある方。障害のある方を取り巻く環境（人的・物的）・社会の問題から、その方の生活・生き方がより困難を抱えている方。（市役所職員）

「障害の重い人」と関わる上で大切にしていることは？

- * 自分自身の気持ちを安定させること。そして「障害の重い人」ともまっすぐな心で向き合うこと。（作業所職員）
- * 物や言葉、反応のやり取りをする際に、大人→子ども、子ども→大人の一方向の関わりではなく、期待感や意外性を経験する中で、その子の世界観を広げること。（養護学校教員）
- * 「〇〇ができない」という捉え方でなく、今本人がどのように世界を捉え、どのような願いを持っているのかを見つけようと心がけています。（市役所職員）

《滋賀支部からのお知らせ》

全障研滋賀支部 2022 年度総会 & 学習会「思春期における発達と教育実践の課題」

2022 年 6 月 19 日（日）午後（オンライン）

身体が急激に変化し、周囲や社会との関係が大きく変容する思春期は、誰もが様々な「ゆれ」「ゆらぎ」をみせるときです。その姿は、おとなになりゆく道行における発達の意義をもつ過程ですが、ときに周囲をも巻き込む困難さ、不安定さにつながることも少なくありません。今回は、障害者問題研究 49 巻 4 号の松島・羽山論文を中心に、思春期の発達の意義、教育実践における課題について皆さんと語りあいたいと思います。

詳細は各職場に配られるチラシや、全障研滋賀支部 HP をご覧ください。



サークル活動報告 MG の会

マリーゴールドの会（通称：MG会）では成人期障害者への支援をしているメンバーが、リモートで活動しています。

大津市の強度行動障害の利用者の事例でした。ユキさん(仮名)は 20 代後半の自閉スペクトラム症の方です。小さな頃からの熱心な家族の教育もあり、英語教材の主人公のセリフは難なく喋るのですが、コミュニケーションには課題がたくさんある人でした。高等部卒業後、すぐに A 施設に通所しはじめましたが、自分のきもちや意思表示の際に、着ている服を脱ぐ行為などが続きました。睡眠障害や他害、偏食もあり、また、場所移動することをかなり不安に感じる様子があるため、常に 1 対 1 対応が必要でした。そこでまず、家族の介護負担軽減の意味だけでなく、本人がシンプルに自分がすべきことや思いを表現する方法を身に着けやすくするため一ヶ月ほどショートステイに挑戦しました。担当職員は当初、「大丈夫かな？家族と離れてもっと不安定にならないかな」と心配したのですが杞憂でした。その施設は生活のための最小限のもので成り立っており、ほしいものがあるときは自らの意思表示が求められました。やがてユキさんは他の利用者がしていることをじっくりと観察し真似るようになりました。一ヶ月が経ち、元の日中施設に戻ってからも、大好きなソファの上で周りをみながら適度に自分の気持ちを出すように変わりました。

振り返ると、彼女は状況の把握に混乱しやすく、周りの動きに不本意についていくなどを繰り返しては荒れる、そんな様子があったのかもしれませんが。自から主体性を発揮するには安心感を得られる場所や時間が十分ではなかったのかもしれませんが。この程度ならわかるだろう、ここは無理だろう、とこちらから線引きしていたことは本人の気持ちに沿って生活や活動を組み立てるものにはなっていなかった。そのことに気づいてから、次の場面が展開するときは、丁寧に説明をし落ち着いて彼女の思いや不安に寄り添えるよう取り組みました。そのことでわかってもらえたという安心感を持つようになり、積極的に自分から手を出してみる場面が増えたのかもしれませんが。

レポート報告を受け、参加者は、ユキさんと共通する課題のある利用者のことなど思い浮かべ、様々な質問が出されました。あまりにクッキリと変わってきたことに驚きを隠せない、という声もありました。周りの状況が読みきれないまま、動かされているように感じたり、不本意なことをやらされようとして拒否する態度を「問題行動」ととらえてしまいがちですが、そうではなく、あくまでも本人さんの気持ちを尊重する生活づくりが基本であることを感じさせられた意見交換となりました。

（ペンネーム くり あんこ）



学習会報告

学校でも家でもない「第三の場」の大切さ～放課後等デイから考えよう～



去る2月19日、リモートで放課後等デイサービスについての学習会を開きました。全障研滋賀支部では、これまでに学校や作業所等の実践を学習会のテーマにすることが多くなりがちでした。今回の学習会の内容について話し合う中で、特に教員の事務局メンバーから「放課後等デイサービスについて知りたい」という声がたくさん上がりました。「毎日子どもを引き渡すだけで、何をしているのか分からない」「もう少し連携できればいいな」「そもそも放課後等デイってどんな制度？」というところから、事務局内で事前学習会をして今回の学習会の準備をしてきました。

今回の学習会は、大津市のWorld of Wingさんの活動報告から始まりました。日々の流れや活動内容の紹介では道場、イングリッシュ、音楽療法など充実した内容が紹介され、参加者からは「すごいなあ～」の声が上がりました。参加できない子どもへの別室での対応や、配慮などについても説明いただき、一人ひとりの子どもを大切に日々を過ごされていることが伝わってきました。

 [World of WingさんのHPで写真付きで活動を紹介されているのでそちらもぜひ!](#) 

報告の中では、学校との子どもの見方の違いや、連携の難しさについても話してくださいました。多くの子どもたちが利用している放デイですが、放デイの職員も学校の教員も、どちらもお互い実情がわからないことは大きな課題です。障害のある子どもたちの“生活”という視点で、どちらも歩み寄っていけるような機会やシステムづくりが求められます。また、放デイ同士での交流というものもほとんどないため、よい実践を共有できる場が必要です。

意見交流には教員だけでなく、他の放デイを設立された方、保護者、そして当事者の中学生の男の子も参加してくれました。男の子は「学校では今、クラス外の関わりが制限されているが、放デイではいろいろな人と関わる機会があって嬉しいこと」や「学校では頑張る時間が多いが、放デイではゆっくりできること」などをお話されているそうです。障害のある子どもたちの大きな居場所の一つである放デイ。学校でも家でもない第3の居場所の実践が、いきいきと語り合える場、そして学校などの関係機関とつながっていける場について、今後も滋賀支部の課題として考えていきたいと思います。

(にむら なつこ)

…感想をいただきました!…

普段、ゆっくりと聞くことのできない放課後デイの様子を聞いてありがたかったです。ケース会議や放課後デイ訪問がコロナもあって、制限が年々強まってきています。養護学校との連携がとれてないという言葉、重く受け止めています。学級閉鎖や休校等で放課後デイのみなさんに本当に支えられているなかだからこそ、お互いが思っていることを出しあったり、よりよいやり方を模索していくことをしなくてはならないと思いました。貴重な機会、ありがとうございました。

いろいろな立場から放デイの話が聞けて、初めて知ったこと、やり方や方針は違ってても子どもの願いを大切にしたいと思っていること、それを立場をこえて話し合う機会がないこと、それが大事だなと思ったこと、等、学び感じました。



声明

ウクライナにおける武力行使と戦争に反対し、障害のある人と家族のいのちと安全を守ろう

2022年3月10日

全国障害者問題研究会常任全国委員会



このたびのロシア政府によるウクライナへの軍事侵攻は、国連憲章に反する侵略行為であり、武力により他国の主権を侵害すること、戦争によって人々の生活を破壊し、子どもを含めた多くのいのちを犠牲にすることは、いかなる理由によっても正当化できません。さらにロシア軍は原発施設を占拠し、プーチン大統領は、核兵器の先制使用も示唆しています。核兵器の使用は、人類の生存を脅かし、地球環境を破滅に向かわせる、決して歩んではならない最悪の道です。わたしたちは、全世界の人びとのいのちと暮らしを危機に追いやる核戦争へとつながりかねない軍事侵攻の即時中止を強く求めます。

一方、日本政府は、ウクライナへの自衛隊の「防衛装備品」の供与を決定しましたが、これは紛争当事国への「武器輸出」に相当し、容認できません。さらに、この機に乗じて日米が共同で管理・運用する「核共有」や憲法9条改正の議論を押し進めようとする動きすら出ています。唯一の戦争被爆国であり、戦争放棄を掲げる憲法9条をもつ日本が、ウクライナにおける武力行使や戦争の拡大に加担することは決して許されません。

戦禍を逃れて周辺国に避難するウクライナの人びとへの人道的支援がはじまっています。ウクライナ国内では、食料品の不足をはじめ、深刻なライフラインの危機に陥っており、障害のある人びとと家族が生き延びるうえでいっそうの困難が予想されます。ウクライナの障害のある人びとと家族が、障害者権利条約第11条（危険のある状況及び人道上の緊急事態）に則して保護されるとともに、食料と住居、移動と情報手段の確保、医療とリハビリテーションの提供などが、国際機関や諸国の連帯によってすみやかになされるよう求めます。

第二次世界大戦後の国際社会は、戦争の歴史を深く反省し、平和と民主主義の実現において共同の歩みをすすめてきました。そのなかで、戦争を含む、あらゆるかたちの暴力が障害を発生させる最大の要因であること、戦争の悲劇を繰り返すことなく、平和な社会が実現されてこそ、障害のある人びとの人権が保障されることを歴史の教訓として、すべての人の権利保障の道を一步一步切り拓きながら、障害者権利条約を手に入れました。

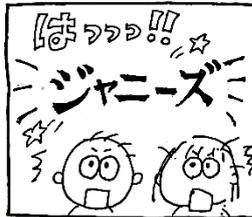
全国障害者問題研究会は、戦争がもたらす惨禍への反省のうえに「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和の内に生存する権利を有すること」を謳った日本国憲法の理念を、障害のある人びとの権利において実現することをめざして研究運動をすすめてきました。わたしたちは、生命・生存・発達の権利を保障しようとする発達保障の理念に立ち、ウクライナにおける武力行使と戦争に強く反対します。

（全国障害者問題研究会HPより引用）

PONTAの
12 ゆるゆる日記



看護学校のころ毎日Aちゃんが手紙をくれた。



ぎにずは喜多川さんもびっくり させてることでしょ(笑)

PONTAの
13 ゆるゆる日記



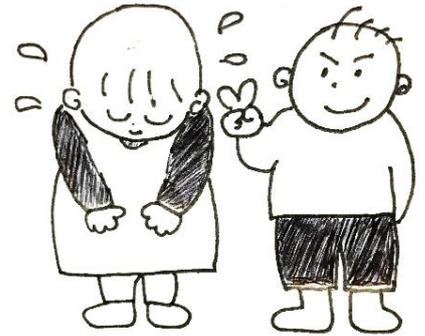
前の774ンは何ともなかったPONTA



嵐の櫻井くんのメンバーカラーは赤!



1・2回目の774ンで副反応が なくても、こんなことになるんですね...



母 ぽんた(20)

Ponta は、20歳のダウン症の男の子です。三人きょうだいの末っ子。

高等部を卒業して3年目、今年も同じ作業所でお世話になります。

姉に続き、兄も家を出たため、初めての一人っ子ライフを満喫するぽんたです。でも本音は「早く帰ってきてほしいなあ...」。家族がそろそろ夏休みが待ち遠しいです。

..あとかき..

編集担当のにむらです。今年も頑張ります。編集担当も3年目、少しは作業が早くなったかと思いきや、むしろ作業時間が伸びています。なんで…。皆さんからの感想が励みです！ご意見ご感想お待ちしております。



◎今回の表紙 「ホップ! ステップ! ジャンプ!!」

(ペンネーム:ユミさん)

ユミさんがおおぎの里で絵画活動に参加するようになり、4年経ちました。新聞にあった若者達がぴょんと飛び跳ね笑い合っている写真を見たあと描きました。彼女の心の風景が明るく春風のように飛び跳ねています。完成したとき、見ている私達まで明るい気分になりました。50代後半からどんどん変化を遂げるユミさん。あなたも春の芽吹きのように、ちょっとジャンプしてみませんか。